
とある学園でのことです。

dr.harry

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある学園のことです。

【Zマーク】

Z5903Z

【作者名】

dr·harry

【あらすじ】

丘の上に立つ学園では今日も事件が起ります。

【谷間のゆり。丘の上の学園】二人の少女は教室で出会います。「あなたに友達はいるの?」教室で本を読む少女に、もう一人が話しかけました。その場面から始まるこの物語は「孤独^{ひとり}」とは何かという軸で展開していきます。

【ライラック。翠の中庭。】顔もいい、スポーツもできる、頭もそこそこいい、でも性格にちょっと問題がある。ツンツン髪の少年ライタは女の子に恋をします。案の定うまくいかない告白までの道

のりを友達と一緒に成就させようと奔走します。少しギャグテイス
トなこの話は「恋^{ふたり}」を軸に進みます。

プロローグ（1）

谷間のゆり。丘の上の学園

学校とは、子どもたちに知識をつかせると共に「学校」という限られた空間で「社会」や「世界」をおしえる「ミニ・コディー」。そこで生活する子どもたちはひどく受動的でいて能動的。話しかけることもあれば話しかけることもある。友人を作ろうとすることもあります。そなことしなくたつていつの間にか横にいることだってある。子どもたちはたくさんの影響を受け、たくさん試してすこしづつ大人になっていく。

プロローグ（1）（後書き）

つたない文章ですが、少しづつ更新していきますのでお付き合いください。感想、評価などいただけたらうれしいです。

第一幕 リコワス

とある学園でのことです。

今日もひとりの女の子が自分の教室の自分の机で本を読んでいました。背丈は九歳という年齢にしてはすこし低めで、半袖で過ごせるような春真っ盛りの陽気であるといつに、制服の上からカーディガンを羽織っています。青白く透き通つてしまいそうな肌は女子があまり丈夫でないことを物語っています。緩やかな癖のある長い髪には、鮮やかな紫色のレースのリボンがあしらわれていました。丘の上に立つ学園の窓からは、すぐそばにある丈の低い茂みと遠くには海が見ます。女の子は窓際の田町たりのいい特等席で読書を楽しんでいました。左手にある窓を10センチほど開け放ち、燻る紅茶の香りを楽しむかのようにして春の暖かな陽気を浴びながら。女の子は、穏やかな春の風が髪をゆらして頬をくすぐるたびに、外に目をやつて緑色に光るしげみが揺れるのを眺めました。そして、優しい目をしてにこりと微笑みます。

そんな彼女のもとにある集団が近づいてきました。どうやら同じ学年の女の子たちのようです。中には同じクラスの女の子もいます。

「ねえ、よろしいかしら」

女の子たちの中の一番えらそうにしてる娘が、本を読む女の子に話しかけます。本を読む女の子の知らない別のクラスの娘でした。くるくると巻いた豊かな髪は濡れたようにしなやかで、顔は陶でできた人形のように美しいです。いかにもお嬢様風のその女の子はほかの娘たちを従えるようにして胸をぴつとまつて本を読む女の子の前に立ちます。

「……ん?」

本を読む女の子は偉そうな女の子の顔をじっと見た後、首を傾げました。本を読む女の子はえらそうな女の子のことをみて、かわいい娘だなと思いました。きれいな髪。それを惹きたてる赤いリボン。

ととのつた顔立ち。背丈はわたしと同じくらい。さつとクラスの中でも中心的な娘なんだろうなと本を読む女の子は思います。でも・・・、なんでわたしに話しかけたんだろう？同時にやつも思いました。

えらそつな女の子はそよぐ風に乱れる髪を左手で整えながら話を続けます。

「あなた、いつもこの時間ひとりね？本ばかり読んで。友達はどこにいらっしゃりますの？」

容姿に似合わない大人びた態度で、嘲笑するかのようになつて言いました。少女の目はすでに、返つてくる答えとそれに対する言葉が映つているかのようでした。

本を読む女の子は開いたままの本をゆびさして、

「こー」

そして窓の外で揺れる茂みをさして、

「と、あそこ」

と、ぽつりぽつりと答えました。唐突に自己紹介をさせられて、本を読む女の子はえらそつな女の子が何を云いたいのかわかりません。

えらそつな女の子は絵本で読むお嬢様みたいに高らかに笑いました。

「ふふふ。本が友達なんておかしな娘。どうせ友達なんていないんでしょう？あなたいつもひとりだものね。さびしくないの？友達がないから本とおともだち？笑っちゃうわ。ものとなんて友達になれるはずないじゃないですか。本はしゃべれないし、一緒に遊んでもくれないんですよ」

えらそつな女の子は、まくし立てるよつよじしてそういうたあと、「でも、わたしたちがいつしょにあそんであげてもよくってよ？」

そういうて本を読む女の子にゆつくりとその白くて小さな手を差し伸べました。それはまるで、捨てられた子猫を拾うよい家柄のお嬢様のように見えて慈悲深く。それでいて自己満足にあふれています。

した。

本を読む女の子はじつとその手を見つめると、かしし間を置いてまた本に手を移します。

「べつにいい」

「なつ！」

えらそつな女の子は眉根をよせて、信じられないといったふうな顔をします。

「なんで!? なんでですか? ひとりでいるのがそんなにたのしい? せつかくわたくしが友達になつて差し上げるところに、それをことわりますの?」

本を読む女の子は本に手を落としたまま一瞬まつり、しかしつきりといいました。

「ちがい」

と。

本を読む女の子は本に落としていた手をえらそつな女の子の方に向けました。そのひとみは静かな湖のように澄んでいました。えらそつな女の子は物怖じしてしまいます。

「あなたと友達になりたくないわけじゃない。あなたは友達をばかにした」

「どつ……どつ……」その友達がこゑつていつんです。本は何も出来ないつて……」

本を読んでいた女の子は本をパタンと閉じて落ち着いた声で話します。

「本はしゃべれないし、一緒に遊んでもくれない。でもわたしにたくさんのこと教えてくれる。不思議なことやたのしいこと、かなしこ」と。たくさん。たくさん。なによりい暇つぶしあいてになつてくれるわ」

えらそつな女の子は鼻で笑います。

「詭弁ですね。どちらにせよあなたには人の友達なんていない。だって、毎日この時間にここを通りますけど、あなたはいつもひとり。

今だつてひとりじゃないですの」

えらそうなの女子は興奮気味に言いました。教室は静寂に包されます。えらそうなの女子は思いました。すこしひどいことを言つてしまつただろうか?ひどい言葉に憤慨しつかみかかつてくるだらうか?それとも田の前の少女は悲しみに顔をゆがめるだらうか?いつの間にか雲に隠されていた太陽が顔を出して教室を再び陽だまりに変えたとき、本を読んでいた女子はにっこりと微笑みました。えらそうなの女子は動搖します。しかし、その笑みが自分に向かられたものでないと気がつくのにそう長くはかかりませんでした。

「ひな!お花摘んできたよー。いやあ、やっぱしあのしげみは危険がいっぱいだよ。ひなには危険すぎる! サツキカエルがぴよんつてさあ……ん?」

るうかの方から元気な女子の声が聞こえてきました。

元気な女子は女子たちに囲まれているひなに気がついて表情を曇らせました。そして、のしのしと、カニが前に向かつて歩くみたいにして腕まくりしながら近づいてきます。

「やややつ! ヘイヘイ、お嬢さん方。わたしのひなを大所帯で囲んでなんだいなんだい? ひなをいじめたりしたらあたしがゆるさないんだからねつ!」

まるで太陽を隠していた雲を吹き散らした暖かな西風みたいに、元気な女子はひなを取り囲む女子たちを遠ざけていきます。

ヒナと呼ばれた女子は愛しいものをみるとよつにしてもう一度元気な女子ににっこりと微笑んでからいいます。

「ちがうの。レン。この人たちは私をあそびに誘つてくれたの」

元気な女子——レンと呼ばれた彼女は引き締めた表情を和らげてひなと顔を見合わせた後、えらそうなの女子に言いました。

「へえーつ。ふうーん。……そ。ありがと。」

えらそうなの女子はレンがなぜ自分に感謝するのか理解できませんでした。

「となりのクラスのキョウウカさんだつけ? この子しゃべるのあんま

し得意じゃないからさつ。でも、これからも仲良くしてね！ よかつたらわたしとも。あつ… でも、そこに誘つちゃだめだよ。この子からだ弱くてあんまり外とか出られないからつ

レンは人差しゆびをたてて、腰に手を当てながらいいます。

「えつ… あつ…」

そんなレンの姿を見てキヨウカは気がつきました。ひなと呼ばれた目の前にいる少女が外の茂みの方をゆび差したときに、みどりといつしょにゆれる小さなひとかげに。

ひなは動搖するキヨウカにいいます。

「わたしはいつもひとりぼっちだわ。この時間もほかの多くの時間も。でもわたしにだつて友達はいる。数は少ないけどみんなつながつてゐる。だから、暇なときにおいてをしてくれる本だつてわたしの大切な友達よ。わたしはひとり。でも、レンをいつもとなりに感じる事ができるからさびしくない。一人だけひとり（孤独）ではないわ。あなたはどう？ 大切な友達はいる？ その横にいる娘達はしゃべれるし、いつしょに遊んでくれるでしょうね。でも大切なことを教えてくれる？ 不思議なことやたのしいこと、悲しいことを教えてくれる？ 病弱な友達のために外の世界を運んできてくれる？」

「…………なつ…………」

ひなの言葉にキヨウカはなにも反論できませんでした。ひなは続けます。

「たぶんしてくれないと思つわ。あなたの横にいるのはお人形さんだもの。クラスを回つて集めてきたのね。でもそれはお友達？ お人形さんは物よ？ ものなんて友達になれるはずないじゃないの。友達ができないからお人形とお友達（お人形遊び）？ 笑つちゃう」「ちがう！」

キヨウカは背中に奔る冷たいものを感じて、ただ叫びます。今立つている場所が陽だまりであることを忘れさせてしまうようなその悪寒は、キヨウカの内側から湧き出すようにして自由を奪つて生き

ます。反論する言葉が見つかってから叫んだというわけではありますでした。ただ、聞くのが我慢できなくなつたのです。そして、血の気のうせた顔でキツとひなのことをにらみます。それが彼女に

とつて精一杯でした。

「ちがうくない。だつて、あなたがこまつてゐるのにさつきから彼女たちは何もしないわよ。言い返してこないし、そこに立つているだけ。あなたの 友達 を馬鹿にするわけじゃないけど。その もの はあなたの友達？」

キョウカは後ろを振り向くのが怖くなりました。

みんながどんな顔をしてゐるのか、どんな目を、どんな表情を、どんなことを思つて何もせずに立つてゐるのか――初めて疑問に思いました。

「あなたいつもこの時間ひとりね?だつて、彼女たちといつもいつもにいるもの。友達はどこにいるの?」

「えつ……」

キョウカはなにも答えられません。

「ねえ。あなたひとりよ〜さびしくないの?」

第一幕 リココス（後書き）

つづきますので、見てくれたらうれしいです。

第一幕 デイジー / リリー

「ねえ、ひなあ」

元気な女の子——レンは大きなリボンの女の子に話しかけます。
「なに? レン」

大きなリボンの女の子——ひなは白詰草で冠を作る手を止めてレンに応えました。

「あのや。せつき怒つてた?」

ひなは白詰草を再度編み始めました。

「怒つてなんかないわよ。ぜんぜんね。これっぽっちむ」

「ふうん」

ひなは隠し切れないあどけない声で、すこし大人ぶつて言いました。レンは心の根に何かを隠しているような表情で相槌を打ちます。ふたりはひなの席で、先ほどレンの摘んできたお花を編んで飾りを作っていました。ついさつきまでいたえらそうな女の子は青ざめた顔をして走つて逃げていつてしまい。取り残された女の子たちは、本当に遊んでくれる持ち主のいなくなつた人形みたいになつて、しばらく呆然とした後方々に散つていきました。波濤のように押し寄せた状況の大きな変化は波が引いていくようにして一気に収束し、それと対照的に外の穏やかな風景は何一つ変わりません。ふたりの会話はゆつくりと続きます。

レンはひなのことじいと見てからいいました。
「うそつき」

「…………」

ひなの手はまた止まつました。そしてレンの目を見つめ返そつとして、できずにそらします。

「なんで……わかつたの」

ひなはまるで一世一代の完全犯罪のトリックを見破られたかのように落胆に沈み、顔を伏せて口を尖らせます。

「なんで？あつは一見ればわかるつて！ あははは」

本心から笑つているレンをみてひなはすこしだけ傷つきました。
わたし・・・うそつくなんだ……。

「それで？何について怒つてたの？」

レンはにつこつと微笑んでひなに聞きました。

「そつ……それは……いきなりあの娘たちがわたしのリボンをぐい
ーっと……」

身振り手振りを交えて熱弁するひなのことをレンは半田で見て鼻
を鳴らし、

「うわでしょ」

そういいました。

「…………」

「どうみてもそういう状況じゃなかつたしね」

そうだよね。心の中でひなは浅はかな自分を責めました。

「白状するね。どうせレンに嘘をいつたつて見破られるだろうじ。
あのね。友達をばかにされたの。レンのことじやないわ。その……
わたしの読む……なんというか……本のこと。」

ひなはレンの様子を伺うようにして上田づかいでいいます。レン
は何も言わずにただ耳を傾けていました。

「それでね。怒つてすこしひどいことをこつちやつたわ。でも、わ
たしだつて泣きそつなくらい悲しかつた。ものはものでもわたしの
大事な友達だもの。泣くところを見られるのは嫌だから、紛らわせ
るために怒つたらつこむきになつちやつた」

ひなのは白状は終わりました。しかし、レンは無邪気に笑つてひな
にさらに質問します。

「ふーん。で？ なんであたしにうそついたの？」

ひなはすこしじギッとして、なにかいい言い訳がないかとひとじ
きり考えるように田を泳がせたあと、観念したとでもいうかのよう
に語り始めました。

「レン。あなただつてとつても、とつても大事な友達よ。でも、思

つたの。あの娘の言つことを聞いて。……本は、ものだから……ものと同じに扱われるなんて……嫌だと思つて……」

小さな静寂が教室を支配しました。暖かな風に揺れる丈の低い茂みがサアとささやきます。

「嫌だよ」

「……えつ」

はつきりと真剣にそう答えたレンをひなは驚きと失望の瞳で見ます。しかし、レンはにつこりと微笑んで。

「嫌だよ。物といつしょなんて嫌。もの扱いされるのも嫌。でもさ、ひなのは……ちがうでしょ？」

ひなは困惑しました。ひなはレンがなにを伝えようとしているのはわかりませんでした。

「ひなはさ、友達がものなんじやなくて、たまたま物だった本が友達なんじょ。それだつたら、べつにいいじゃん。あたしはひなのことだーいすき。さつきひなもあたしのこと大切な友達つて言つてくれたよね。あたしはひなの友達。そんで、ひなは本も友達つてことだよね！ひなは、全然おかしいくなんてないんだから、ほら！胸張つて！あつ……でも、『めんね。意地悪い方して』

ひなは目をぱちくりさせて、そして「ふふつ」とすこしだけ笑了。

「ううん。実はね、わたしあつからずつと迷つてたの。本とお友達なんてやつぱりおかしいのかなつて。自信もてなくなつちゃつたの。でも、レンのおかげでわかつた氣がするわ。ありがとう」

ひなは心のそこからお礼を言いました。そうしてもう一度驚きます。わたしのちつぽけな悩みを隠すためについた嘘の悩みを解決する手段を示すとともに、本当の悩みまで解決してしまつなんて。

わたしが悩みを隠そうと嘘をついて、わざとへんな問いかけをしたのもきっとお見通しなんだろうな。

「そろそろ帰ろっか」

レンは元気にそういいました。そとはまだ明るいです。教室

の中は蛍光灯をつけていなくてもはっきりと本を読めるくらいのいいお天気でしたが、もう帰る時間なのでした。

「やうね。でも、今日は一緒に帰れないわ。図書館によつていかなないと」

「そつかあ。じゃあね。また明日」

「あつ……ちよつとまつて」

氣をつかつて急いで帰り支度をして帰りうとするレンでしたが、ひなが呼び止めます。そしてできたばかりの田舎草の匂をレンにかぶせて、

「わたしの……一番は、レン……あなたなんだからね」

顔を赤らめてそんなことを言いました。「本といつしょの扱いをされて嫌じやない？」そんな陳腐な問いかけに帰つてくる答えなんてはじめからわかつてました。そんなことで悩んでいたなんて嘘だつて見破られることだつてわかつていました。何十年、何百年とたくさんのことを変えらずに教えてくれる本も大切な友達です。そうであつていいのだとレンが教えてくれました。でも、変化し続けるこの一瞬をともに歩んでくれる友達がひなにとつては一番でした。

「うん！」

第二幕 ヴィオレット

キヨウカちゃんがいなくなつて、わたしたちはどうしていいのかわからずただ呆けていた。多くの娘たちは自問自答していたと思う。あのとき、なんでキヨウカちゃんのために言い返して上げなかつたのかなつて。ひとりでいたわたしたちと、キヨウカちゃんは友達になつてくれた。うれしかつた。でも、ひなちゃんつて娘の言うことも間違つてはいなかつた。わたしたちには意思がなかつた。群れていればそれでいいと感じた。誰かといつしょにいればクラスで浮かなくてすむ。惨めにならずにする。いじめの対象にならずにする。たしかに、こんな動機で集まつた人間たちが、大切なことを教えあつたりできるはずなんてない。そんな理由でいつしょにいただけのわたしたちは、そういうた意味ではきっとお人形さんだつたんだろう。いまさらになつて自分たちが情けないとthought。

「ねえ、ひな」

「ん？ なに」

ひなちゃんつて娘とレンちゃんつて娘のお話が聞こえてきた。

「あのおさあ。わたしたちつていつ友達になつたんだつけ？」

「いつのまにか」

「ん、そういうんじやなくて！ いつ知り合つたんだつけつてこと」「レン。人間つて知り合つた瞬間から友達なの？」

「そのとおりや！ 感じるものがあーあつたのさあー！」

「……そうね。確かわたしがレンに話しかけたのがはじめじやなかつたかしら」

「えつ……それどこだつけ

「忘れたの……？ まあいいわ。すぐそこのそとにつながるドアの

横でレンが靴紐を結んでいるときに、わたしがお花を持ってきてほしこつて頼んだのがはじめ。あの時は勇気を総動員してレンにはなしかけたの。活発そうだったから、正反対のわたしの頼みなんて聞

いてくれないとと思つて……」

「あ～。でも、あたしだつて思つたよ。勉強できて、女の子うらしくて、かわいいひながあたしに何の用かなーつて。『田障りよ。そこでいて。私より一センチおおきいあなたの座高が私の視界を邪魔するの』とか言われるかと思つてす」（シドキッとしたよ）

「…………」

「どつしたのひな？急に黙つて。まさかお花を摘みに言つてほしいつて、その口実だつたとか……」

「…………」

「ひな？ 何か答えてよ！ そんな食い倒れ人形みたいな表情で固まられてもなんもわからんないよ！ ひな！？」

そつか。

わたしは氣がついた。わたしたちはみんな「遊んでもいいわよ」なんて不器用にいつ彼女に誘つてもらつた。ひとり（孤独）から救つてもらつたんだ。だつたら何で、わたしたちはあの娘に同じように声をかけてやれないのだろうか。わたしたちはお人形さんだつた。でも今は遊び相手のいなつたのガラクタ。そんな今だから思える。

——あの娘と、友達になりたい。

「あそんであげる」勇気をもつてそういうてくれた。あのとき大切な何かを教えてくれたあの娘の友達に。

「ねえ」

決心したわたしはみんなに話しかけた。そして、みんな同じタイミングで「ねえ」つて言つたことの驚いた。

「あのや。キヨウカちゃんのこと探そつ！」

「そうだね。わたし教室見てくるよ」

「じゃあわたし図書館にいく」

「それじゃあわたしは……」

わたしたちはみんなでキヨウカちゃんのことを探すこととした。それぞれに散つていつたみんなの足取りはきっと軽いだらう。だつ

てわたしの足が軽いんだから。誰がはじめにキヨウカちゃんに話しかけられるのか競争するみたいな勢いでみんな教室を後にした。友達になれたとしても、あの娘はけつこうわがままだから、当分先まであの娘にとつてわたしたちは振り回されるお人形かもしれない。でも、大切なことを教えられるお人形さんになろう。ひなちゃんって娘も、ものだつて友達つて言ってたし。

第四幕 ピンク

「今日ははとても楽しかったわ」

大きな紫色のリボンの女の子はやさしく声をかけました。

「あなたって、とっても面白いのね」

その声はふたり以外誰もいない、古びた茶色が印象的な図書館に響きます。

「はじめ見たときはね、すこし汚かったからちょっとなつて思つたんだ。でも、ひとは見かけによらないつてかんじかしらね・・・でも今日はこれでお別れ」

女の子の背中はすこしでしたが震えていました。女の子はそれをしつかりと抱きしめます。

「ありがとう。楽しかったわ。ずっととずっと忘れない。あなたのことを友達じゃないって言つた人がいたけど、わたしたちはずっと友達。あなたとの出逢いも、あなたから教えられたことも、あなたの思いでもずっととわたしの大切なたからもの」

女の子は大粒の涙をこぼします。

「大好き」

そういうつて女の子は図書館のソファの上にそれを置いて去つていきました。

第五幕 スイートピー

それは、ただ静かにソファのうえに腰掛けていた。つぶらつぶともなく堂々と、しかしどこか悲しげに。

「ねえ、あなたひとり？」

赤いリボンをつけた女の子はそう呼びかけました。その声はふたり以外誰もいない、古びた茶色が印象的な図書館に響きます。

「そう」

少女もどこか悲しげでした。

「あなた、こんなところで何をしているの？ いつもあなたを見かけるけど、ずっとひとりね」

少女はつい何分か前の調子で、それに話しかけます。そして、急にうつむいてスカートの端をぎゅっと握り締めると、

「わたしと同じね……」

そういうて泣き始めてしまいました。誰もいない図書館にすすり泣く声が雨音のように響きます。

女の子はやがて泣くのをやめて、それに向かって言いました。唇は震えていましたが、はつきりと――

「ねえ、友達になってくれない？」

花言葉

リコリス（悲しい思い出、ひとりぼっち）

デイジー、ひなぎく（むじやき）

リリー、ゆり（あなたはわたしをだませない）

ヴィオレット、すみれ（忠実）

パンク、かすみやう（じゆうかうのよるひ）

スイートピー（門出）

A l i l y o f t h e v a l l e y、谷間のゆり、すず

ひな（ひなづくのやくわく）

第五幕 スイートピー（後書き）

第一部はいいでおわります。引き続き、第一部を読んでいただけたら嬉しいです。

プロローグ（2）

学校とは、教養をつける場所。常識を学ぶところ。勉強をするところ。教えるのは先生とは限らない。学ぶのは生徒とは限らない。いつの間にか主体性を身につけた「生徒」たちが、「先生」に学ぶ場所。

学校とは、挑戦する場所。すべてが初めてで、崖の上から飛び降りるみたいな試練が待ち受ける場所。一度や二度の失敗で、彼らはあきらめたりしない。無意識のうちに上へ向かって努力する。

この世の中で、一番「…したい」という願いに溢れる場所。

プロローグ（2）（後書き）

第二章では一人称視点がほとんどです。恋の話です。

第一幕 秋海棠

とある学園のことです。

今日もつんつんした髪の男の子が、中庭の真ん中に立つ大きな木の根元に熱い視線を送っていました。その瞳はまるで黄金色の琥珀をつめたようにキラキラと光り、ただでさえ暑い夏の午後をさらに暑くするのでした。少年の顔立ちは年齢相応に丸みを帯びてはいるものの凛々しく、外で運動などしたのなら校庭に出て汗を流す姿に女の子が少しどキッとしてしまつくらいに精悍なのです。しかしどうでしよう。男の子の顔は少し緊張にこわばつているようです。

その中庭は学園の広い敷地の一区画、旧講義棟のなかに在りました。今使われている講義棟は、広く、大きく、新しく、白を基調とした前衛的な建築は無機質ながらもそこに「冷たい」と形容されるようななかつこよさがあります。旧校舎は三階建ての木造建築でした。いたるところに修繕の跡が見受けられ、つい最近まで使われていたことを物語つてはいるものの、老朽化の具合は激しく、実は先生たちに入つてはだめといわれているような場所なのでした。新しい講義棟のなかにも、広くて美しい無菌室の中に作られた公園みたいな中庭があります。しかし、彼女たちは好んでここに集まつてくるのです。

中庭の大きな木の下には五人の女の子たちがいました。おままでとをして、カードあそびをして、そして疲れたころに木を座椅子代わりに寝転がる。時折、そよと風が吹くと、女の子たちの頬をなでた後、金の油に照りついで緑色の葉っぱが揺れて、優しい木漏れ日を少女たちに落とすのでした。それが彼女たちの日課。まるで、忘れ去られた楽園で戯れる妖精のように、女の子たちは昼休みを謳歌します。

男の子は、その中のひとりの妖精に用事がありました。このときばかりは、彼女以外の妖精も男の子にとつてはちょっとした邪魔者

です。なぜなら男の子は彼女だけに用事があるのでありますから。

男の子は中庭を囲む旧講義棟の柱の影に隠れていきました。とりあえず一步踏み出します。この一步にどれだけの労力と勇気を振り絞ったかわかりません。しかし、柱からばねがくつついていたかのように、すぐに影に舞い戻ってしまいます。そのたび、女の子たちに自分の姿を見られていないかとドキドキし、そーっと木の影をのぞいて何事もなかつたと確認すると、ほっと胸をなでおろすのでした。彼女たちの「楽園」を壊してしまうことを恐れた開拓者のような気持ち……ではありません。そんなのは言い訳です。男の子はわかつていました。すぐに隠れてしまふのはきっと自分が弱いからなのだと、そのくらいわかつっていました。自分のけちな「体裁」や「評判」、「名声」のために動けないでいる自分を見つけるたびに男の子の心は悔しかでいっぱいになります。でも、男の子はそんな枷を断ち切つて進むだけの「理想」がありました。もう自分の中で完結する「理想」なんかじやありません。男の子は一步踏み出し、一步田を踏み出したのです。

「ん？」

ひとりの女の子がこいつを見ました。

「どうしたの？ナズナちゃん？」

「うん。なんかさつき人がいた気が……」

「氣のせいだよ！ きっと」

「そうだね。えへへ。もう昼休み終わりだね。帰ろつか。あんまり遅くなると先生にしかられちゃう」

そういうつて女の子たちは男の子の隠れる柱のすぐ横を去つていきました。

男の子はとても情けなくなりました。彼女には気がついてもらえず、クラスでも目立つほどの女の子の一瞥（？）によってひるんで引っ込んでしまつたことを。男の子は大きな声で叫び……たくさんいましたが、まだ近くに女の子たちがいそうなのでやめました。この思いをどこかにぶつけたくて、情けのない自分を叱咤したくて、

白い壁を殴りつけました。すると、手にジンジンと響く鈍い衝撃…
はなく、意に反してあっけなく手が壁を貫通して、勢いあまって老
朽化した柱の中に半身を突っ込んでしまいました。

あたりに静寂が訪れます。木の葉の揺れる音、小鳥のさえずり。
柱の建材の木の隙間から漏れる陽光。お尻だけを柱の中から突き出
した男の子は、涙がくるのをぐつとこらえました。
こうして今日も、昼休みが終わります。

第一幕 秋海棠（後書き）

新しく始まつた物語は、第一章も少しだけ関係しています。第一章が少しくらい感じだったので、第二章は明るい感じのハッピーエンドになつたらいいなと思って書きます。

僕は恋をすることにした。

おつと、いきなりすまなかつたね。「ほん、僕の名前はライタ。この学園に通う三年生だ。つまり九歳つてことだけど、小学生だからってあなどらないでほしい。僕はみんなとは違う、大人の頭を持つているんだ！大人が子供かを決定するのは、単なる体の大きさやだせい（惰性）で生きた密度のない人生の積み重ねで決まるものではない。「どのくらい考えたか」であると僕は思うのだ。僕は生きてきたこの九年間を誰よりも密度の濃いものであると自覚し……そして！大人の思考を手に入れたのだつ！その思考パターンで考えた結果、僕は恋をすることにした。

なぜそのような結果に至つたかは、ひとまずおいておこう。

自慢じゃあないが僕はクラスでも友達が多く、成績だつて一番（ではなくて、あの本ばっか読んでる「ひな」とか言う女子にいつも先を越されて何でも一番なんだよちっしちゅう……）まあこの話はおいておくにしても、野球の部活にだつて所属していて、僕は期待のエースとしてもてはやされている。何かに属しているというのは社会的な信用にもつながるからね（でも、体育の時間はあの「レン」とかいう女子が怪物じみた運動神経でクラスの注目を総なめにするんだよなあがつてむ……）。

そして、一般の年ごろの男子なら誰もが抱く感情、この僕という存在をみんなに親しみやすくするための手段。それが「恋心」だ！僕にソレが必要な理由はふたつばかりある。

恋をして、僕には小さな秘密ができる。「〇〇〇〇ちゃんが好きだ」という秘密だ。これは同じ「恋心」を持っている男子とさらなるキズナが生を生む。秘密を共有しあう仲つてやつだ。つまり、半ば秘密でなくなることを前提しているわけだが、僕にとつて「恋」なんてものは手段に過ぎない。しつているかい？ある遠い遠い国で

は結婚していることが社会的な信用のひとつになつてゐるんだ。なぜなら、守るべきものがあるという使命感が生まれるからなのだ。

：まあ、結婚までは行かないかもしないけど。

あとひとつ。恥ずかしい話、僕はまだ恋をしたことがない。恋を経験してみたいというのもまたひとつの中の理由だ。

さつき話したみたいに、僕にとっての「恋」とは社会的信用を得るためにするものだ。だから、極論すれば一つ目の理由なんてあつてないようなものだ。本当の恋ができなくてもいい。誰かが好きという事実らしきものさえあればいいのだ。それで、僕はまたひとつエリートへの道を歩むつ！

生徒会長に俺はなるつ！

違う教室にいる、前側の席にいる彼女を好きになることにした。

教室のドアの影からそーっと、自然にのぞいてみる。くるくると巻いた綺麗なロールヘア。憂いを帯び、濡れたような黒いまつげと凜々しいつり目。ツンと張り詰めた彼女の周りの空気。頬は白く穢れを知らない白磁のようでいて、誰よりもやわらかそうだ…。

つごほん！別に見とれていたわけではないつ。彼女を観察していただけだ。

教室に戻つて机に座る。僕の作戦は完璧だ。あの子の性格はちょっとキツめだから、みんな寄り付こうとしないけど、実は男子の中では結構人気が高い。あの子を好きになつて、どうしても仲良くなれないという事実（仮）をほかの男子と共有する。さらには、そこからぼろりとこぼれた噂話にクラスの噂好きの女子たちが食いつき恋の話に花が咲く。…花が咲くかはわからないけど、女子はスキヤンダラスな話が大好きなのだ。

ふつふ…ふふふふふつ。

これで僕はまた新たな人脈を作りクラスの信用を得ることができる。

「おい… おい… ライタ。きいてんのか？ ライタ！」

話しかけてきたのは僕の友達の一人、リュウノスケ君だった。流れるみたいな黒髪にふちの厚いメガネをかけた男子。たしかリュウノスケくんも女子の中では結構人気があった。僕ほどではないが勉強もできるし、せっかくの大きな瞳を半ば、だるそうにしている彼は、女子の中でも「クール」でかつこいいといつ話になっているらしい。

たしかに、世の中を諦観しきったようなその双眸は、まるでこの世の力オスの中から自分だけの真実を見極めようと勤めている涅槃に入った僧のようでもある。

僕は、いきなり話しかけられたことにも動じずに、慌てふためくこともなく、死神に魂を売った大学生のような顔で言つてやつた。

「リュウノスケ… 僕はア… 新つ世界のホ… 生徒会長になるフウ

…」

「お前なにぶつぶついつてんだ？」

大丈夫じゃないヤツを見る顔でこっちを見てきたので、何事もなかつたような顔をしてリュウノスケくんに向き合つた。もう作戦は始まつてているのだ。

「リュウノスケくん。実は、僕には好きな子がいるんだ」

「…。ふーん」

リュウノスケくんはなぜか知らないけど心底いやそうな顔をした後に相手の気分を害さないように無理やり驚いて見せた。気に触つてしまつたのだろうか？ 他人の恋の（のろけ）話しへ聞くのはあまり気分がいいものじゃないって、どこかの本で読んだことがあるけれど、彼はそんなに狭い心の持ち主じゃない気がする。何かあつたのだろうかと疑問に思いつつ次の言葉を出そつか迷つてはいる。「で？ どうしたんだよ。気になるから続きを話せよー。」と、言つてきてくれたので話すこととした。

第一幕 林檎（後書き）

登場人物ライタの内省なのでいつもより少し読みにくいかもしれませんが、続けて次話も読んでいただけたらうれしいです。。第一幕の時勢とは少しずれています。第一幕が本来プロローグの体裁をとっているはずなのですが、構成上やむ得ずこのようになつております。ご了承ください。

「で？だからどうしたんだ？」

「え？だからって…そのー」

すべて（仮）を話し終わった後のリュウノスケくんの反応は思つたよりも淡白だった。むしろ、いうやつを間違えたかもしれない。リュウノスケくんは「告白したくてもできない」なんていうようなキャラではないのだ。きっと、好きな子がいたらその背中で好きにわせるタイプだ。

くそつ、はじめからつまづいてしまった。…いいや、これは好機！
いつのまどりうつ？

どうしても告白できない僕が、恋のアドバイザー・リュウノスケくんに頼んでアドバイスをもらつ。それを実行する課程は、秘密にしなくともいろいろなところから漏れるだらう。もちろん、わざとらしく大げさに実行する。それを聞いたクラスの友人たち僕に同情を抱き、さらに好感度を上げる…という作戦だ。…われながら完璧の作戦だ…。まあ、実行に移そう！

「いいや、それでね、リュウノスケくん。キニに教えてもらいたいんだ。モテる秘訣ってヤツをさ」

へりくだつたり、頭を下げることも時には必要だ。しかし、最後に勝つのはこの僕、ライタでなければならない。

「え？何言つてるんだ？俺はモテないよ、さつきだつて、振られてきたばつかだし」

「なん…だと」

これは、予想が外れたことへの驚きではない。無自覚。いいや、それ以前に、リュウノスケくん彼女いたんだ…。このとき、へりくだるとか言う以前に、このお方はもしかして本当に尊敬に値する人なのではないかと激震している、僕がいた。

いやいや、何が起きても僕の計画は揺らがない！

「いっ…いや、キミは手伝うよ。じゃあ、そう…とりあえず僕だけで頑張つてみるから、キミは手伝ってくれないか?たのむつ。このとうりだ!」

でも、僕は内心ひどく動搖していた。

「いいよ。でも具体的にはどうすればいいの?」

リュウノスケくんはクールに見えるけど、友人を大切にするいいヤツだ。内心、〇・Ｋしてくれるか不安だつたけど、半ば「いいよ」と言ってくれることを確信していた。「こと、友人関係においては見る目を持たんといかん」そうお父様が言つていたけど、僕の目が正しいのなら、リュウノスケくんは胸をはつて合格点であると言える。

「ありがとう。リュウノスケくんは僕のすることを横から見ているだけでいい。何か間違つたことをしたと思ったらすぐに注意してほしいんだ」

「いいけど、力になれるかな」

「もちろんさ!」

「ううして、僕はスタートラインについたのだ。

彼女は隣のクラス。いつも、決まつた女の子たちと遊んでる。彼女たちの行動パターンを探つてみることにした。

まず、登校して一時間目と二時間目の間はどうやら、クラスの女の子たちだけで話しているようだ。別段、ほかの女子とかわつたことはない。しかし、昼休みになると教室の外に出かけていくのだ。どこに行くのかとついていつてみると、どうやら旧講義棟であるようだ。たしかここは、老朽化が激しいために立ち入り禁止になつてゐるはずだ。でも、そんなことはお構いなしに、女の子たちは旧講義棟の中に入つていつた。

電気のついてない木造校舎内、しかし、斜陽が差し込み構内は割りと明るかつた。夜入つたらさすがに怖いかもしけないけど、陽光

が照らす旧講義棟内は静寂に包まれ、しかし斜陽がきらきらと反射させるほこりの粒はどこか暖かさを感じさせた。

ほこりっぽい廊下を女の子たちに見つからなによつて歩きながらリュウノスケくんは言った。

「なあ、ライタ。これって、その…ストーカーってヤツなんじゃ」「ちがう。ちがうよりリュウノスケくん。これは予習というヤツか。彼女たちにどのポイントで接触し、彼女だけを孤立させ僕の思いをぶちまけるかという目的のね」

「ライタ…きもちわるいよ」

どれだけ彼女を愛しているのか（仮）ということを力説したつむりだったが、どん引きされたので、訂正することにした。

「冗談せ。告白するのもタイミングって必要だと思つんだ」

「そうだね」といつてリュウノスケくんは黙つた。なぜなら、女の子たちがどうやら、ドアの向こうに消えていつたらしいからだ。ドアはもう壊れてしまつていて、その役割をしていなかつた。近くに着て気がついたことだが、ここからはどうやら、外に出られるらしい。近くに身を隠すにはちょうどいい大きさの柱があつたので、そこに一人で身を隠しながら出て行つた彼女たちの様子をうかがうことになつた。そして僕らは彼女たちを観察しようと柱から身を乗り出す。

「――！」

「出て行つた」というのは間違いなのかもしれない。そこは講義棟の中に、まるで箱庭のように作られた中庭であつた。その中庭の中央には緑の葉をいっぱいにつけた大きな木が立つていた。何の木かは知らない。でもその木はとても大きく女の子たちのためだけの日傘となつていた。初夏の日差し。頬をなでてゆく金色の風。彼女たちは講義棟から「出て」いた。しかし、同時に、まるで僕なんかじゃ手の届かない別の世界に「入つて」しまつた気がした。

旧講義棟の中をつてしまつてしかたどり着くことのできない空間。そこは、学校の裏の林と旧校舎が囲む秘密の場所。

そこで、戯れる彼女たち。

僕は、むかし小さなころにお父様に連れられて見に行つた、有名な絵のことを思い出していた。湖に浮いた浮き島に、大きな木が立つていて、そこで戯れている妖精たち。陽光が印情的だつたその絵は僕をその絵の中に引き込み、無性に胸を高鳴らせたことを覚えている。

今、眼前にある、その「絵画」の中に描かれた彼女の笑顔に僕は、あの時とは少し違う胸の高鳴りを感じていた。

「どうしたの？ライタ」

「え？」

我を忘れていた。そんなちっぽけなものではなかつた。僕の心は、一瞬彼女に奪われていた。

「いつ…いや」

そう自分で感じた瞬間に、いきなり恥かしさがこみ上げてきてしまつた。

「今日は、これくらいで…かえろう」

いきなりどうしたんだと、リュウノスケくんは得心の行かないような顔をしていたが「わかつた」といつて了解してくれた。

第二幕 芥子（後書き）

次の話では第一章で登場したひなとレンが出てくる予定です。

教室に戻ってきてからの僕は、つい数時間前と確實に何かが違った。まるでそれは、胸の中で春の虫たちが蠢動するようにどこか具合が悪く、しかし悪い気分ではなかった。

なぜそんな気分になってしまっているのかと考えるたび、浮かんでくるのは彼女のこと。

「なあ、リュウノスケくん。彼女…何してるのかなあ、いま」

「…授業中でかい声で話しかけてくんなっ！」

ほうけていたようだ授業など一切頭に入つてこなかつたが、今は授業中らしい。休み時間に話すみたいに話してしまつていた自分に、今さらになつて驚いてしまう。前の席のリュウノスケくんは「授業受けてるにきまつてんだろ」と、小声で僕に言つてくれた。

そうか、僕と彼女はいま、同じことをしているのか。

「はあ」

胸にたまつたどきどきが、口からため息となつて漏れ出した。

じゃあ、僕も授業を頑張んないとな！

「はあ」

…つだめだ。どきどきで授業を受けるつて場合じゃない！

この感情をなんと云うのだろう。ひどく胸をしめつける、なんと云つか…形容できない…アレ。

語彙は人一倍だと思っていた。でも、どうしても口にできないんだ。口にしてしまつたら、うすつぺらい感情のひとつになつてしまいそうで怖い。

彼女がなにをしているのか知りたい。

彼女が何を考へてゐるのか知りたい。

彼女と話してみたい。

そんな気持ち。

「この気持ちに名前をつけたるといつなら、これは探究心といつヤツだろー！そー、これは算数の問題の答えがどうしても出ないときとか、野球でホームランを打つ口がつかめないときの感情に似ている。『その』先を知りたいつていう感情だ。そつとやうなのだ。

彼のことを持つと知りたい。

うーん。でもどうやって。

「ねえねえ、リュウノスケくん」

こんどは周囲に気をつけて、声を小さめにリュウノスケくんに話しかけた。

「なんだよ」

リュウノスケくんは黒板を書き写す手をとめて、僕のほうに顔を少し傾ける。

「彼のことを持つと知りたいんだ。でも、このまま彼女を観察するだけじゃ限界があるし… その、なんか後ろめたい。どうしたらいいのかな？」

リュウノスケくんは眉にしわを寄せて宙を眺めながらひとしきり考えた後、僕に答えをくれた。

「まず自分を知つてもらつたらどうだ？ 知りたいなら直接話すのが一番だろー？ でも、ライタとその娘の接点は、今のところない。まず、友達になつたりしたらいいんじやないか？」

「えつ？！女子と？！」

「だからお前はでかい声でつ！」

そういつてゐるうちに授業は終わり、休み時間が来る。

リュウノスケくんに言われたとおり、僕を知つてもりつことにしようと思つ。でも、どうやって。いきなり話しかけるのはなぜか気が引ける。女子にだつてたくさんと知り合はる。でも、友達かといわれると、きっとそうではなくて、ほとんどいなし。

最終的には別のクラスの女子と友達になるなんて、はずかしい。

「なら、順序を追つて小さいところから仲良くなればいいよ。そういういくつちにライタもだんだん慣れてくるんじゃないかな？」

「具体的には？」

リュウノスケくんはひとしきり唸つたあと、僕にまた答えをくれた。

「軽いジャブ的なプランで、そつだな、その娘と仲のよさやうな女子と仲良くなつて、さりげなくライタを紹介してもうつて言うのはどうだ？」

「わかったよ。それでいつてみる」

よいアイディアが浮かぶわけでもないので、リュウノスケくんの言つとおりにしてみようと思う。

でも、彼女といつも遊んでいる友達たちはみんなクラスでも目立つほうじやない人たちばかりだ。とりあえず全員の顔を思い浮かべてみたが、話したことのある女子なんて一人もいなかつた。

でも、こんなことじや僕はくじけないっ！友達がだめなら、友達の友達、つまり僕と割りと親しい女子に頼めばいいことじやないか！結構遠回りになつてしまふけど、これもいたしかたなしである。この考えをリュウノスケくんに言つと、いつたん苦笑いしたあとに肩をポンとたたかれ「頑張れよ」といわれた。実際僕もまどろっこいとは思う。でも、しないよりはまづつとましに思えた。

そいつは運動が恐ろしいほど得意なくせに、いつも友達と一緒に室内で遊んでいた。たまに外に出て、花や綺麗な石ころなんかを教室に持つて、きておとなしく遊ぶ。彼女の力を求めるドッヂボール男子たちはたくさんいるというのに、人のはけた教室内でふたり遊び。

体育が得意な人間は必然的にクラスの人気者になれる。などというのは、部活のコーチがいっていた。そんなこんなで、運動の得意

だつたコーチは小学生のときクラスの人気者だつたらしい。はじめは信じていなかつたけど、どうやらほんとらしい。現に、今日の前にいる女子、レンちゃんはクラスの人気者である。その、裏表のない性格と誰にでもせいいっぽいの笑顔を振りまく人柄もその要因といえるだろうが、小学三年間の経験則上体育の得意なヤツはクラスの中心であることが多いことも確かであつた。その人気者と、何よりも人脈を重んじる僕が親しくないはずもないの、レンちゃんに頼むことにしよう。たしか、レンちゃんは彼女の友達の一人、4組のナズナつて娘と仲がよかつた気がする。

「やあ、レンちゃん」

「ん？ なんだいつ？ ライタくんつ」

レンちゃんは今日も友達のひなちゃんと遊んでいた。ひなちゃんはいつも本を読んでいて体が弱いのだけど、僕よりも頭がいい。かくゆう、ひなちゃんには成績でいちども勝つことがない。ひなちゃんは大きな目を眠そうに半開きにしているあたり、リュウノスケくんと似ていて表情をしているけど、さすが頭がいいだけあって（？）その瞳には底知れない奥が秘められているように感じた。ひなちゃんもいきなり話しかけてきた僕に胡乱にまなざしを傾ける。

「じつはさ、キミの友達のナズナちゃんつて娘と友達になりたいんだ。何でかというとだね？ その友達のキヨウカちゃんつて娘とも話がしたいからなんだ。しらないみんなとも友達になりたいんだよ。おねがいだ。キミから接触をしてくれないか？」

リュウノスケくんは何故だかあきれた顔で「お前、ばかだろ」とつぶやいていた。あとでちゃんと事情を聞こう。

「わかつたよつ！」

そういうて、レンちゃんは急ぎ足でかけていった。

取り残された僕とリュウノスケくん、ひなちゃんの間には小さな沈黙が生まれた。ひなちゃんは僕が勝手にライバル視しているだけで、あまり話したことがないし、結構無口なタイプだ。レンちゃんが戻つてくる間、少しばかり教室に静寂が訪れるだろう。

「ねえ

「そうつぶやいたのは以外にもひなちゃんであった。ひなちゃんは僕に向かつて話しかけていた。

「ねえ、キヨウカちゃんって娘のこと好き？」

「ほおうえつ？」

あまりにいきなりだつたものだから、驚いて変な声を出してしまつた。とこりうか、意図してばらしたわけでもないのに何故ばれる？しかし、眞の目的というのはつまりこれなのだ！僕が恋のために頑張る僕をクラスのみんなに見せ付けなければならぬ！

「つうん。そうだよ。そなんだよねー。でもや、直接告白とかできなくてさ。どうしようかなーっておもつて……あ、ゼッタイニ、ミンナーハ、ナイジヨダカラナー。ウワサトカニサレタワコマツチヤウシナアー」

「ふ……相変わらずの迫真の演技。みたか！でも、話しちゃうんだろー？ここまでいと逆に誰かに話したくなつちやうんだろー？いいぜ？話せよー。僕の思惑通りに……

「話せないよ」

「え？」

ひなちゃんのめはとても真剣だつた。席に座つたまま僕の目を見すえて、僕に大事な言葉を言つみうつにひとこと。

「話さないよ。あなたにとつて、とても大事な気持ちなのだらうから。おうえんしてゐる」

「え？ あ……うん。ありがとう」

僕は物怖じしてしまう。何かまことにこつてしまつたんじやないかとやはりギッとした。

そんなやり取りが在つたとも知らず、レンちゃんがものすごい勢いで廊下を爆走してきた。

「うーーーたーくんつーつれてきたよー！」

よしーよくやつた！レンちゃん！ありがとう……

……つれてきた？

までよ。そういうことじやなくてね？さつげなく僕の話をしてくれただけでよかつたんだよ？

はっ！

リュウノスケくんまさか、「おまえそれじや、伝わってね」とつていいたかつたんじや。

「接触したいんでしよう？あれ？違つた？でも友達になりたいっていつてたよね？じゃーいつしょかー！」ま、ビックちもつれてきたから、手間が省けてよかつたね！」

辺りを見回す。レンちゃんの走るスピードに追いついて来れないせいか彼女はまだ顔を見せていなかつた。

そして、リュウノスケくんはいつのまにかいなくなつていた。ひなちゃんは私は関係ないといったふうに本に手を落とし、全くこつちを意識していない。

「……めんつ！」

僕はいちもくさんに逃げた。彼女の友達ならともかく、いきなり話すなんて僕には荷が重すぎるつ。

昨日は大変な日にあつた。レンちゃんとうまく意思が通じ合えなくて、彼女を呼ばれてしまつわ、そのあとレンちゃんの家まで謝りに行かなきゃならないわ。

しかし、あきらめるわけにはいかないのだ。

どれもこれも、僕がさらなる高みへ上りつめるためだ。

「昨日は逃げちゃつたけど、今度は勇気を出して接点を作らつと思つうんだ！」

教室の中、朝の会が始まる前の小さな喧騒の中、ボクはリュウノスケくんに話しかけた。

リュウノスケくんはこちらを向き、「ふーん」といつて意味ありげな目でこちらをみた。

「なんだい？」

「そう、何度も失敗できるわけじゃないんだぞ？」

「わかっているよ」

「ほんとうか？」

僕はリュウノスケくんの言っていることの意味がわからなかつた。その意をくんでくれたのか、リュウノスケくんは小さな声で僕に説明してくれる。

「ボクはライタの友達だ。だから注意だけはしてやりたい。ライタ。お前が不器用なのは、ずっと前から知つてゐる。で、不器用なりにうまくやつてるつてことも知つてゐるし、ちょっと偏つた考え方をしている気がするけど、周りのみんなよりもずっと大人だつてことも知つてゐる。ここからが本題。お前、わざと話をでかくするようにふるまつてない？」

「あつ……え」

リュウノスケくんの分析は恐ろしいほど的中していた。僕はかえす言葉を必死に探したけど何もでてこない。いきなり、心の奥底を見透かされたようで、僕はまた逃げ出したくなつた。

「あたつてるのか？ だつたら、もうやめたほうがいい。昨日のことはもうクラスの一部でうわさになつてゐる。昨日あれだけ騒いでたんだ。誰かが見ててもおかしくない。もちろん、それはお前が望んでやつたことなのかもしれない。おおかた、お前はそれを話の種に『みんなとの交流をさらに深めよう』とか思つてゐるのかもしれないけどな、そんなにうまくはいかないよ、きっと」

「――」

僕は完全に閉口してしまつた。しかし、いいたい事はたくさんあつた。何でソレがいけないことなのか、うまくいかないなんてなんでいえるのか。

疑問を言葉にできずに口をもじりつかせていると、リュウノスケくんは答えをくれた。

「もしかしたら、高学年とかもつと大きくなつたら、そういう駆け引きとか大切になつていいくのかもしれない。でもさ、お前は大人に

なつたつもりでいても、周りはみんな子ビもだ。あいつと、冷やかしに来る人たちだってたくさんいるだろ？

あ…。全くの盲点だった。と、自分で気がつく。

僕はきっと頭の中で、「男子」は自分、「女子」は自分の中のイメージだけでショミレーションをしていたんだ。

でも、実際相手にするのはみんな違つて、みんな僕みたいに考えるとは限らない小学三年生だ。

「お前はいいかもしない。そんな状況でも、わざとおどけて見せて、お前の思惑通りにクラスのみんなの中心でい居続けられるかもしれない。でも、キヨウカつて娘はどうなる？冷やかしたり、からかわれるのはお前だけじゃないんだぞ。ほかのクラスまで面倒見るつもりか？生半可な気持ちで、他人の気持ちも考えずに好きとか嫌いとかを利用するのは、いいことじゃないと思つ」

ああ、僕はなんて愚か者なんだらう。自分の至らなさに気がつくのは、この数分の間で何回目だ？どれもこれも、僕が何も考えずに撒いてきた種によるものだ。お父様が全部知つたら、きっと地の果てまで殴り飛ばされるだらう。

でも、

「いままなら、どうにかなる。あの時、途中からボクはあの場に居ない。見られてないんだよ、うわさを流したやつに。だから、何のかわりもない第三者のを裝つて、このうわさが勘違いだつてことをみんなにながす。まだ、そんなに広まつてないから、今ならまだ間に合つ」

リコウノスケくんの言葉はとても厳しかつたけど、どれも思いやりがあつて、優しかつた。いつてくれる言葉は全部ありがたくてうれしい。

でも、

「生半可なんかじゃない！」

「――？！」

大きい声を出してしまつたために、クラスのみんなを驚かせてしまつた。

僕は、

「あいつが、」

まつた。自分がムキになつてしまつていたことに気がついてクラスのみんなに軽く弁解し、リュウノスケくんに向き直る。

「生半可なんかじやない」

今度は小さな声で言つた。リュウノスケくんは少し驚いたようになりを見開き、それから、僕の言葉に耳を傾けてくれた。

「やつ。君の言つとおり。はじめは誰でもよかつたんだ。君の言つたことはほとんどあたつてる。でも、今は彼女に興味があるんだ。好きとか嫌いとか僕にはまだよくわからない。でも、彼女とあつて話してみたいし友達にだつてなつてみたい。この気持ちは嘘じやない。だから、少しの間、おたてつだつてくれないか」

クラスの信用とかはもうどうでもいいつておもえた。もうどうでもいいことなのに、さつきまで「信用」なんて言葉を言い訳に、自分の中のもやもやした気持ちからの行動をどうにか正当化していた。でも、リュウノスケくんのおかげでそのもやもやがはれた気がした。リュウノスケくんは、また少しだけ驚いた顔を見せて、そのあと少し考えた後に、やつぱり

「うん。わかつた」

と言つてくれた。

「ありがとう」

第四幕 留紅草（後書き）

次の話からテンポが少し変わります。

第五幕 翁草（上）

「私のこと、嫌いになっちゃったんだしょ」「

誰もいなくなつた音楽教室に、感情を押し殺したような声が響く。先ほどまで授業だったこの教室は、少しもつた熱気と、急に人のはけた寂しさに包まれていた。

ボクは彼女に「うん」とは言わなかつた。嫌いではなかつたから。「わかつてたよ」「わかつてたよ」

何も言わないでいると、彼女の口からから言葉が生まれる。そう、感情に任せて、生まれてくる。ひとつこと、ふたこと。

そうやつて、何でもかんでも、何の根拠もないのにわかつたような口ぶりでまくしたてるんだ。女つて言つのはそういう生き物なのだろうか。

「

ボクが何か言つと、彼女の顔からは青ざめた炎が消え、一気ぐしゃぐしゃになり、最後には泣きながら音楽室を出て行つた。

なんて言つたのかは忘れてしまつた。あの娘の美しい顔を赤くて醜い化け物みたいにしてしまつた言葉。思い出そうとも思わない。

女性の泣く顔はとても厭だ。^{いや}ひどく感情的で、ヒステリックで、泣けばわかつてくれると思つてゐる。傲慢の塊のように思えてさえしまう。初めてそう思つたのは、母親の泣くのを見たときだ。

「わかつてたよ」なんて偉そうなこというなり、最後くらい笑つてくれればいいのに。

女つて言つのはわからない。

「…ん」

窓から優しく風が流れてくる。その風の中に緑色といつたらいいのか、草木の香りを感じてボクはかすかに目を開けた。机に伏しても感じることのできたその強い香りは、昨日の雨のせいでいつ

もより際立つ。

…ああ、嫌な夢だつた。

ボクは浅い眠りから目を覚まして、まぶたをこすつた。起き上がる一瞬、軽いだるさを感じたが、こぞ起きてみると午前中の授業づかれだとが一気に吹つ飛んだように感じられてスッキリとした気分になる。

今は昼休み。

周囲を見渡すと、いつものように教室でふたり、ひなとレンが机をあわせて遊んでいた。

陽光だけで、人口の光が全く灯されていない昼の教室。外の光と教室の中の影が対照的で、室内はわりと冷たい印象を受ける。

しかし、季節は初夏である。

あれから既に一ヶ月がたとうとしていた。

おつと、わるい。ボクはリュウノスケ。今日もライタのせいでここを動けないで居るかわいそうな少年だ。

ライタがキヨウカという女の子にアプローチを続けて、はや一ヶ月。

あいつがボクに、「恋をしてしまつた」と打ち明けてから一ヶ月。その「恋」とやらが始まつたてまえであつたうつことは、なんとなく気がついていた。

ライタはよく考えて行動するくせに、わずか一歩のところまで詰めが甘い。たぶん自尊心が強すぎるために自分自身を客観視できないからだろう。

目的を掲げて、その時点で「始まり」「見通し」「結果」のすべて考えてしまう。そこまではよく考えているといえる。しかし、状況というものはいつも自分が思つてゐるよつとまくはいかないのだ。「線」のように見通すのではなく、「面」を捉えるようにわり行く状況を觀察し続け、重要な「点」を逃さないように臨機応変に行動する。そういうスタンスが正しいと思つてゐる。

どうやらライタは思い通りに行かないと自分でも予想外の行動をと

つてしまつりし。あいつをたとえて言つなら度胸試しで崖から海に飛び降りる勇気はあるが、落ちていく恐怖を考えていなくて目を瞑つてゐるうちに木に引っかかってその場から動けなくなる…みたいだ。自分で言つてよくわからなくなってきた…。

でもそんな感じ。見切り発射したはいいもののあたつて砕ける勇気がないのだ。

そしてもうひとつこつてやるなり、実際に行動するのがとても下手だ。ライタの行動、言動は自分のしようとしていることが複雑になればなるほど、露骨にその性質を出してしまつ。もつと違つた表現とか、態度とかをとつたなら、自分の思つてることを隠しながらも相手を利用できるかもしない。しかし、直接的な表現や、態度をとつてしまふから少し考えれば悟られてしまつ。

だから、あいつの行動の端々から何を思つてこるのかといつことが簡単に推測できてしまつ。と、いつても今のところ気がついているのはボクだけだろうけど。

それが良しとでたのか、悪しとでたのかあいつ自身しかわからないわけだが、ライタは紆余曲折を経て当初の目的を忘れて本当にキヨウカという娘に恋をしてしまつたらしい。

本人曰く「探究心」らしいが、それは多分違う。僕はよく知つている。これは「恋」というヤツだ。

ライタに協力し続けているボクだが、何故今日も教室の自分の席に取り残されているのかという話はおいておいて、あいつがいかにして一ヶ月すごしてきたのかを思つ出してみようと思つ。

クラスの一部で、ライタとキヨウカが怪しい仲であるところとがうわさにならうとした二週間前、ボクはライタにえりそつてに説教をくれてやつた。

ほんの一週間前に振られた男の口からよくそんな言葉が、といふくなるよつた歯が浮くセリフに自分でも驚きはしたが、思つたこ

とを言つてやるとあいつは素直に納得してくれた。ボクが正しい確証なんてもちろんどこにもない。そうであると、いうのに、馬鹿みたいに言つことを聞いているように見えたライタであったが、ソレまでの反応とは違ひ目に強い意志を感じたので、ボクはもう少し（ライタに付き合い始めて今日で三週間になるナビ）力になつてやることにした。

「Jの三週間で何が起きたか。」であるが、まあ、ひどいものだつた。

作戦「一〇一」・ほんのり自分をキョウウ力に意識させる作戦

この作戦は、キョウウ力のクラスである1組にライタが赴いて、近くの友達と他愛ない話をすることによって、とりあえずライタを視界に入れる。少しでもライタという人間を意識させようと、いつも地味な作戦であった。

はじめ実行して失敗した「友達の友達」作戦と比べて、このたびが、ボク的にもわるい作戦だとは思わなかつた。

結果

キョウウ力は全く氣にとめていなかつた。

一組のクラスにいつても、昼は旧講義棟に行つていていないし、授業の合間の休み時間は時間があまりに短すぎた。

しかし、行動しなければ今にも体の内側からはじけ飛んでしまいそうな今のライタは好機を狙うなどということはできない。

毎回の休み時間に教室に押しかけていつては、せつせと「ハハハ」とケーション。

一組のやつらの中に、「なぜ、わざわざたいして親しくもないたクラスの人間がきて、どうでもいい話をして帰つていいくのか?」という疑問を生んでしまつた。

結果、ライタはクラスのに居場所がないんじゃないのか?といつ
ウワサが広まり、ライタは一組のやつらから同情の目で見られるよ
うになってしまった。

……といふことで失敗。

もつ少し直接的なほうがいいと考えたために次に練られた作戦は、

作戦コード2 チラシ、チラシとキヨウカのほうを見て偶然に目
が会うことを利用とした作戦

田が合えば嫌でも意識してしまうだろう。この作戦の強みはそこ
だけじゃない。ライタの「とりあえず何でも試してみよう」という「
度胸さえあれば、内容がどうであれ話をするきっかけにもなる。

チラシ（偶然田が合つ）

「あ、キミは、キヨウカさんだけ? そういうえば先日は申し訳なか
つたね。え? あつは、忘れちゃったのかい? まあ無理もないね、僕
はキミと今日始めて話をするわけだからね。レンちゃんと、キミと
話せるようにたのんだライタだ。よろしく。え? なんで話したか
つたかって? それはね、キミがうつくしそうだからさ! ボクはそう、
春の香りに誘われたミツバチのように。キミを求めてしまったんだ
!」

甘い展開である。

この作戦立案に当たつて、ショミレー・ションをした僕らであつた
が、あまりの完成度の高さにふたりでほくそえんでしまつたものだ。
この作戦は確かに地味である。しかし、大きな可能性を秘めたこ
の作戦は、ボク的にもわるい作戦だとは思わなかつた。

彼女は全く気にしていなかった。

まず、誤算だったことがキヨウカとその友達の性質であった。

キヨウカは限られた5～6人としか遊ばず、その友達が集まると即固有結界を作ってしまう。

すると周囲が目に入らなくなってしまうらしい。魔女たちがサバト（集会）をするわけではないのだから、もつと外の世界に目を向けてもいいんじゃないかと思つたりしたが、それはそれで楽しくやつてる証拠なのかもしない。

それでも、一度だけ目が合つたことがあった。

場所は廊下。時は授業間休み。

キヨウカはツンと胸を張つて、モデルみたいに姿勢よく歩いていた。すれ違う4歩くらい手前。ボクは目が合つたのを確認して、小声でライタに話しかける。

「おい。チャンスだろ？ はなしかけるよ」

しかしライタはそのまま直進し、壁にぶつかりそうになつたところでやつと停止。赤く染まつた頬を隠すようにぼそぼそとつぶやく。

「彼女は大切なものを盗んでいきました」

「…は？ おまえ半径1メートル以内にさえ近づいてなかつたひ」

「わたしのこころです」

「…。…はいはい」

目が合つただけでこれとは。

とこうことで失敗。

もつと、思い切つた作戦のほつがいいと思い考え出されたのが、

作戦コード3・偶然をよそおつて廊下の角でぶつかる作戦

これならライタも逃げられまい。育ちがいいというのもあって、あいつは見かけによらずジョントルマンだ。ぶつかつたら例えわざ

とであつたとしても女性に気を遣つはずだ。またに背水の陣。
きつかけなんて些細なものでいい。

「あ、ごめん。ぶつかっちゃつた…たてる？」

でも、

「いつてえ…ぶつかつてへんなよー前見て歩け！」

でも、

「ぶつかつてきたのはそつちでしょ？…」

でも、

「立つて歩け 前へ進め あんたには立派な足がついてるじゃない
か」

でもなんでもいいのだ。

会話が成立すればそこにきつかけが生まれる。あとはライタしだ
い。

無理やりだが、じうじうベタなシユチューニョンは漫画やアニメで出会いのテンプレートにもなっている（じじこ）。
ボク的にもわるい作戦だとは思わなかつた。

結果

どこにでもある一字の廊下。入念なセッティングと、主人公を除いた行き当たりばつたりのキャスティング。天気はあいにくの曇り。風は低く唸り、空は今にも泣き出しそうである。つこに実現したその瞬間。ライタはゆっくりと踏み出し、角に行き着く。二人が足を踏み出し…。

そして、間一髪、キョウウ力をよけた。

「おい！！！なにしてんだよ！」

彼女がいなくなつたあと、ボクはライタに半ば怒鳴りつけるみたいに問いただした。

「僕にはできない！」

「え？」

ライタはわなわなと肩を揺らし、悔しそうにじぶしをこぎりながら

ら泣いていた。

「僕にはできないっ！彼女を傷つけるなんて！僕が奪われるのはいい。ここにどうが、身体どうが、給食のデザートどうがなんだつてもいいといつ！彼女になり…しかし！彼女の笑顔を奪う権利は僕にはないっ！」

「…はいはい」

…はいはい。

ジョントルマンというののはなしではなく。結局ライタはキヨウ力の前じゃ崖から飛び降りる勇気もなくなるのであった。こうなつてしまつては、ライタという人間の強みはほぼゼロになつてしまつ。

そこで編み出されたのが、今も続いている作戦である。

作戦コード4・昼休みに思い切つて、中庭に突入。告白。

なんでこのシンプルな答えに、こんなにも時間をかけてしまったのか。はじめからこれでよかつたのではないだろうか？

これならば、男と女の一騎打ち。好きだといえれば、勝つにしろ負けるにしろ、このながきにわたる戦いは終わる。人脈どうこうといったようなものをつかつて、わざわざ面倒な策を考えなくてよい。ライタという一人の漢の勝負である。

作戦を考えてきたボクにも、ここまでたどり着くのに多くの時間がかかってしまったことについては非がある。

しかし、これで最後にしようじゃあないか！

暫定結果

今までの結果を話そつ。「今も続いている」からお分かりの通り。今まで2週間ばかり続いているこの作戦だがすべて失敗している。

田を含ませただけでのぼせてしまうライタがはじめから告白なんてハードルが高すぎたというのは承知していたことだった。しかし、人は学び、いつしか乗り越えるのだ。何十回でも試すといい。今日は記念すべき10回田だ。

4回田まではボクもついていったのだが、

「リュウノスケくんがいると、きっとキミに甘えてしまうからね。だから、教室でまつっていてくれないか？」

と、言われ今田もあいつを待ちぼうけである。

正直、ボクもライタと作戦をたてて実行する（のはライタだけ）のは楽しかった。しかし、この1週間弱はこのとおりお昼休みがお昼寝タイムとなっている。待っているだけというのは結構つらいものだ。たまにはみんなとサッカーやドッヂボールがしたい。

そんなことを思いながら視線を外に移す。校庭は教室の窓とは逆の方向にあつた。しかし、外が恋しいことには変わりない。窓の奥で静かにゆれる緑色。そんな平和な景色を見ていると、また眠気が襲ってきたので教室の中に視線を移す。

教室の中では、やはりひなとレンが遊んでいる。

…そうだ。あの出来事を忘れていた。その日からライタがすこしおかしなことを言つよつになつた、あの出来事を。

あれはボクが中庭についていかなくなる前。ライタの三回田の告白のときだつた。

第五幕 簿草（上）（後書き）

引や続や縦草（中）に続やま。

あれはボクが中庭についていかなくなる前。ライタの二回目の告白のときだった。

ボクとライタは前日、前々日と同じく立ち入り禁止の旧校舎の中庭におもむいた。しかし、いつもは木陰で戯れているはずの女の子たちはどこにもおらず、大きな櫻がだけがゆつさりと風になびいているだけだった。

どこか悲しげな、木の根元にふたりで近づいてみる。
ひどく簡単に形容するなら、美しい空間。

ゆつくりと流れる時間。やさしく吹くかぜ。こぼれてゆれる木漏れ日。ひんやりした木の幹。葉の重なる静かな旋律。その、忘れ去られた楽園は、美しいものだけを閉じ込めた翠の箱庭のようであつた。

その中心に来てボクは、はじめて理解かる。彼女たちが、「立ち入り禁止」のテープをまといでここまでここに来る理由。

いつもは彼女たちを包むその空間を侵してしまったことに、なぜか小さな背徳心を感じてしまう。ボクなんかがいていい場所でない気がして、何故だか落ち着かない気持ちになってしまった。

「おい。ライタ。今日は来てないんじゃないか？」

そんなこと、見れば分かる。居心地の悪さ（不自然な居心地の良さ）をどうにかして紛らわすために、適当に並べた言葉だ。問題は、なんでこんなに天気のいい日にこの場所を訪れないのかということだった。

しかし、ライタは何も反応しない。気になつて顔を見ると、

「つはあ。つはあ…ここで、毎日、彼女が…」

なんかすごく危ない顔で荒い息をしていた。

というのは、きっと事情を知らない第三者が持つ感想だ。

フォローを入れてやるなら、「ライタは顔を赤らめて、節目がちに照れていた」といったところだ。

いつもキョウカが遊んでいるところに来るだけでコレとは、重症である。

でも、そんなライタのヤツがすこしうましいなんてのは、口が裂けてもいえない。

ほほ、放心状態のライタを正気に戻して教室に連れ帰るみちのり。先ほどの木造旧講義棟とは対照的に、現代建築と、奇抜なデザイン性、白を基調とした新校舎の廊下を歩く。外では、みんなのはしゃぐ声や、大縄跳びをまわす掛け声などが聞こえてくる。せっかく時間が空いたから、校庭でやつてたサッカーに混ぜてもりおつぜ。などという話の流れを完全に無視してライタは、

「なんで今日はいなかつたんだろう?」

などと、いまさらな話題を振つてくる。ボクは一通り考えて、それらしい答えを見つけ出す。

「たまたま、今日はキョウカさんが休みだつたんだろ。きっと。だからみんな集まらなかつたんじゃないのか?」

「ちがうー。」

教室の手前まで差し掛かつたところで、なにやら怒鳴り声が聞こえてきた。

僕の意見に誰か意義を唱えたものかと、一瞬驚いたが、そういうわけではなかった。

しかし、たしかにボクの推測は間違つていた。なぜなら、怒鳴り声の主はキョウカ本人であつたからだ。

そのあとに、ここからでは十分に聞き取れないような女子の小さな声が聞こえて、それからキョウカが教室から飛び出してきた。

ボクは位置的に大丈夫だつたが、ライタは急に廊下に飛び出してきたキヨウカにぶつかりそうになつてしまつ。

が、やはり紙一重でよけた。

ライタの運動神経は他と比べてもかなりいいほうだ。だから、よけることもできれば、よける一拍前にキヨウカを確認してわざとぶつかることだつてできるはずだ。しかし、ライタはやはりよけた。作戦を引きずるつもりはなかつたが、みすみすチャンスを逃すとは・・・まあ、ライタらしいといえばそうなのだけど。

教室に入つてみると、そこにはこのじろ見知つた顔のヤツと、いつもどおり、ひなとレンがいた。

キヨウカが怒鳴つて出て行つてしまつた所為か、昼下がりの明るい教室は背景とは対照的に妙な緊張感に包まれている。

このじろ見知つたやつらはキヨウカの取り巻きであつた。しかし、全員が気まずそうに下を向いたまま黙つてゐる。

おかしいのはそいつらだけではない。

レンはいつもの笑顔ではなく、困つたようにひなを見つめておろおろしていた。ひなはいつもより血色がいいようにも見える。そして、心なしか肩で息をしてゐるよにも見えた。

一度訪れてしまつた静けさの所為で誰も口を開けようとしない。ボクが何があったのかを聞こうとして、口を開けようとしたとき、

「おい…」

ライタが先に言葉を口にする。どこか震えたような声で、何かにおびえるように。

「彼女さつき、泣いてなかつたか」

その疑問に対してもう一回口を開く。ひなは、じつとライタのほうを見つめているだけ。レンは何かいたそうだつたけどやはり黙つてゐる。女の子たちは相変わらず下を向いたままだ。泣いていたかどうかボクには分からなかつたが、どうやらそういう状況であつたことはこの場の反応から推測できる。

「誰が、泣かせたんだ? なんで…」

状況がどうであったのか、この場にいなかつたボクらが知る良しもない。しかし、ライタの大切な人であるキヨウカが泣いて出て行つたという事実はゆるぎない。

いつもはよく考えるライタであつたがこの「ころは調子がおかしい。ボクは、恋に盲目なライタが「キヨウカがよつてたかつて誰かにいじめられた」なんていう偏つた考えにいたつて暴走してしまふんじやないかと心配してしまつ。

「泣かせたのはたぶんわたし」

口を開いたのはひなであった。いつもの寝ぼけたみたいな半眼をまつすぐライタの方に向けてしつかりと「わたしが泣かせた」と口にしたのだ。

ライタは目を見開き、驚きをあらわにした。意外であつたのはこの場に元からいたレンも多少驚いた顔をしていたことであつた。多分レンは途中から入つてきたのだろう。きっと教室で起こつたすべての状況を知らないのだ。だから、いい加減なことを言つわけにも行かず黙つていたということか。

「なんで…そんなつ！」

「あなたの気持ちはわかるわ」

つかみ掛かりそうな勢いで「なぜ？」と問つたライタを、何の物怖じもせずひなは見つめていた。

「あなたの気持ちはわかるわ。大切な人が傷つくのはどうてもくるしい。自分が傷つくときはぎゅっと胸が痛くなるけど、大切な人が傷ついてもそれは他人のモノだから、その人の痛みをかんじることはできない。でも、きっと痛いんだろうなつて思つていても立つてもいられなくなる。それはあなたが優しいから。だから、私が許せない。でも、あの娘が泣いていたのが全部私のせいだとして、あなたは私をしかりつけたあとに、どうするというの？彼女の前に連れて行つて謝らせる？それとも、キミの敵は僕がたおしたよなんていつてほめてもらうの？本当に彼女のことが大切な、ちがうでしょ。『わたし』っていう乗り越えなきやならないハードルを低くしてあ

ボクにいえたことじやないけど

げるんじゃないくて、『彼女』自信が飛ぶように寄り添つてあげなきやならないんじゃない？」

「ああ、なんてこいつはお人良しなんだろう。ボクはひながつい先日、ライタに『好きな人がいる』といわれたときに『おうえんしてる』と返したこと思い出していた。ひなは、この状況をわざと利用しようとしているのだ。

はたから見れば、笑えるワンシーンだ。なんてつたつて、自分を叱りにきた人をえらううな口ぶりで諭した上に、『自分が泣かせたが、お前が私をしかつても生産性がないから、さつさと消えろ』と言つてゐるようにも聞こえる。

しかし、きっとライタがそうであると信じてゐるであろう「状況からして間違つてゐるのだ。

ボクは状況をすべて把握してゐるわけではない。しかし、ひながすべて悪いなどといふことはきっとないのだろうとおもう。むしろキヨウカがただ返り討ちになつただけなのかもしれない。それを思わせるように、キヨウカの取り巻きの女の子たちは、ひなが『全部私のせいだとして』といった瞬間に気まずそうに田配せをしたり、驚いた顔でひなを見ていたりした。

さらに、ライタはキヨウカが好きだという事実とライタ自身の性格。

そんなこちらの事情まですべて把握した上で、ひなは自分を敵役にして一芝居撃つたというわけだ。何がいいいかというと、

「彼女、ひとりで泣いてるんじゃない？おいかげなくていいの？」

つまりは、ライタにキヨウカを慰めさせて救いの王子様にして作戦だ。本人は王子様になれるなんて考えはないのかもしれない。きっとライタの中にあるのは、あの場所で泣いてるキヨウカの顔とそれをどうにかしたいという気持ちだけだ。

ライタは、この状況では悪ものであるはずのひなから諭を受け本

氣で悩んでいた。

このときばかりは、変に勘違いしないで素直にバカなままでいてくれ。それがお前のためだ。

ライタは大きく深呼吸して息を止めたあと、顔が真っ赤になつたくらいでプハアッと肺の中の息を解き放ち、それから、

「おぼえてるよ。」

などといつて、走り去つていった。さつきのは何の儀式であったのだろう。彼にしかわからない。

再び静寂を取り戻した教室。ライタがいなくなつただけで、数刻前とたいして代わり映えのない空間。

「おまえ、やさしいんだな」

教室に取り残されたボクは、ライタにかわつてひなに礼をいう。ひなは少し目を横に移し。

「おもつたことをいつただけ」

「一言だけ、そういつた。」

ボクもあの教室でじつとしていられる空氣ではなかつたので、ライタを追いかける。走つていつたためにライタの姿は既に廊下になかつたが、行くところなどといつものばかり限定される・つまりキヨウカが行きそうな場所。ライタだつてすぐにキヨウカを追いかけたわけではないのだから今のボクと同じ状況であつたわけだ。ライタが既に廊下に姿のないキヨウカがいると思つた場所。ボクの頭の中ではそのふたつが見事に符合した。

ボクは割りと急いで中庭までかけていく。

中庭の前、意味をなさなくなつた開けつ放しのドアの前に、ライタは立ちつくしていた。

もしかしたら、キヨウカと話をしている最中かもしけないと思つて声をかけずに近づく。しかし、その必要はなかつた。

「彼女、ここにはきてないのか」

「

上気した顔で少しだけ息を切らせ、ライタはひとつぶやく。
そこにキヨウカはいなかつた。つい数分前と同じ景色だけが広が
り、林のほうから吹いた風だけが熱くなつたボクらの額を洗う。

そのあとも、ボクらは学校中いたるところを探したが、キヨウカ
は結局どこにも見つからず、話はその翌日のことになる。

次の日、ボクらがキヨウカを見たのは廊下であった。いつものように代わり映えなくシンと胸を張つて姿勢よく歩くキヨウカは、まるで媚びることを知らないねこのようでもあつた。

前日と代わり映えのない姿にライタは「なんで」と一言。
確かに、立ち直りが早いという意味では驚くべきことだ。しかし、
そう何日もつじうじしているヤツもすくないだろ。ライタはたぶ
ん、キヨウカがもつと打たれ弱いと思ったのかもしれない。そして、
これは同時にライタが「キヨウカを守つてあげたい。だから、キヨ
ウカはか弱くあってほしい」という、男の子らしい願望であったの
かもしれない。

さりに驚くべきは、キヨウカとひながばつたり廊下で会つてしま
つたときだ。

出くわしたふたりは、まるで約束していたかのように2メートル
ほど離れてとまり、無言で向き合つ。

キヨウカは一度目の端を尖らせて敵視しているような態度をとる。
あわや、修羅場かと思ひきや、

「「きげんよう。ひなさん」

そう口にした。ひなは動じることなく、それが礼儀とでも言つよ
うにスカートの端をちよこんと押せんで、

「「きげんよう。キヨウカちゃん」

と静かに言つ。続けて、ふたりは懐かしい間柄の友人のように少

しきりちなく話し始めた。

「昨日はひどいこと言つてごめんなさい」

「べつべつに氣にしてなじいませんわー」こちらにや…あなたにひどこにと言つて…もうしわけ…なかつたとこつか…なんと言つが…」

だんだん声のトーンが低くなつていくキョウウカは、どこかはすかしがつていてる様にも見える。

「あなたの友達のほうはどう?わたしのいつたこと、氣にしてなかつた?」

「わたくしには分かりかねる質問ですね。でも、たぶん」

「そう」

「…ありが…と」

遠くから見ていて聞き取りずらかつたが、確かにキョウウカはひなにそういうたように聞こえた。これには、ボクも驚きだ。ライタとともにキョウウカのことを調べたから、キョウウカという人間が大体どんな人物であるのかといつのはわかっている。少し怪しげなお嬢様口調とプライドの高さ。一部の友人意外にはあまり社交的ではなく、かといって内向的というわけでもない。そんな彼女から、昨日喧嘩して泣かせられた人間に感謝を口にしたのだ。

キョウウカはしきりに制服のブレザーの端をいじりながら、口をとがらせうつむいている。

「え?」

「なつ…ななな、なんでもないですわ!べつ、べつに私のおもいあがりとか…なんとか叱つてくださつたことに感謝なんてこれっぽつちもしてないんですからね!そう…元から思い上がってなど、いなかつたですしつー?…」

「え?」

「むつき…………。そうやって、わたくしを焼きつけて!」

キョウウカとひなはふたりとも柄にもなく騒いで、しかしここが楽しそうであった。いつもはたいして表情を表に出さないひなも、ど

「かにこやかだ。

「じゃあ、ひとつ」と。これからキョウカちゃんって娘に言ひはまず
だつた、もう私だけのひとり」と。『べつにあなたのためにやつて
あげたんぢゃないんだからね。わたしは自分を守るためにただ必死
に言葉をならべただけなんだからね。ありがとうなんていわれる資
格はわたしにはないんだからね。こちらこそ。わざわざ話しかけて
きてくれてありがとう』

「……つ／＼／＼／＼」

キョウカは面食らつたみたいに目を見開いて、顔を真っ赤にした。
「じゃあね」といつて、ひなは180度回転しその場を去ろうと
する。顔を真っ赤にしたままのキョウカはぎゅっと手を握り締めて
「まつて！」と叫んだ。

「？」

立ち止まつたひなは疑問符を浮かべて、キョウカをじつとみつめ
た。これから起ることに、廊下の角の陰から見守る（のぞく）ボ
クらも固唾を呑む。

「あの……ともだちになつてくれ……ません……ひと？」

「なんで？」

「え？ なんでつて？」

キョウカの顔にさす小さな絶望。無理もないだろう。あのプライ
ドの高そうなお嬢様がわざわざ頭を下げたのに、その話をけつたの
だ。何故だかボクまで悲しい気分になつてくる。

「まだ、ともだちじやなかつたの？」

その言葉にキョウカはハツと顔を上げ何かいいたそうにしたあと、
また顔を赤くして下を向いた。なぜだろう、今、ボクの顔も赤い気
がする。

「またね」

そういうて、ひなは自分の教室の入つていった。
ライタは「なんで」と、またつぶやいていた。

昼休みがくる。ボクとライタは今日も一緒に中庭へ行くことにした。学校に来て、今日初めてライタと会話したとき「今日は中庭にはいないんじゃないか」とふたりで話していたのだが、朝から大変なものを見せられた所為で「いない」などと断定はできなくなつていた。いいや、むしろはじめはキヨウカは今日休むのではないかと、いうところまで考えていた。

こうしてボクらは今日も旧校舎の中庭に行く。初夏の旧校舎は、いつももましてどこか美しさを感じさせた。約一ヶ月前に着てから、何度か訪れる事になつたこの場所。はじめてきたときには気がつかなかつたが、何度か来るうちにさまざまな発見をするようになつた。旧校舎はところどころ窓が割れていたり、鍵が効かなくなつて開きっぱなしのドアがあつたりと、聞くにも増してひどいスピードで老朽化していた。使われなくなつて2年の歳月が立つこの旧校舎であつたが、教室の中には猫の親子が住んでいたり、破られたスピーカーの網の向こうには鳥が巣くつていたり。窓際の柱の根にはエノコログサが生えていたり、トイレは使われていなければずであるのにもかかわらず綺麗な水が出て、右から三番目の個室からは何者かの気配を感じたり。たくさんの生き物が校舎へと侵入していた。余談であるが、トイレを含め校舎は使われなくなつてから水を止めているらしい。なぜ水が出るのかなどということは、考えないことにした。

人のすまなくなつた家屋の老朽化が激しいと聞くが、こういった動物もその一端を担つてゐるに違ひない。なぜ（ボクは望んでるわけではないが）取り壊さないのか分からぬ状況であつたが、そこは大人の事情というヤツなのだろうか？

春らしい春が始まつたばかりの一ヶ月前と比べて、だいぶ騒がしくなつた校舎は今日も昨日と同じ。ボクらはいつもの場所に着く。昨日と同じ中庭の風景のさきには、意外にもいつものような楽し

そうなキヨウカたちの笑顔があつた。

朝の廊下で見たものが衝撃的過ぎて、たいして驚きもせず、予想の範囲内のことであつたが、見ていてやはり小さな違和感を感じる。ライタにはこの話をしていないので、ボクは独自に昨日何があつたかをレンに聞いていた。どうやら、昨日のケンカのはじまりはキヨウカがひなの大好きな友達のひとりを馬鹿にしたことらしい。

キヨウカだつて頭ごなしに悪口を言い散らすような性格ではない。きっと、何か別の目的があつてひなに話しかけて、話の流れでそのようになつてしまつたのだろう。ボク自信としては、学校でレン以外と遊んでいるところを見たことがないひな「友達」というやつが少し気になつたりするのだが。しかし、まあなんであれ「大切な誰か」が否定されたり、傷つくのを見るのはいい気分ではないだろう。ここにもひとり、同じような理由で昨日学校中を走り回つたやつがいるし。

それで、あの無口な割りにいつときははつきりといひながキヨウカの痛いところをついて返り討ちにしたつてわけだ。

ボクたちが教室に着いたとき、キヨウカはひとりで廊下に出て行つた。ということは、取り巻きの女の子たちはひなとケンカするに当たつてたいした戦力にならなかつたようだ。

あの場しか見ていないボクがあれこれ言うのもおかしな話だけど、すぐにキヨウカを追いかけもせず、ひなに言い返しもしなかつた女の子たちは、一見キヨウカを見捨てたとも思えた。だからボクは楽しそうにキヨウカと遊んでいる女の子たちを見て小さな違和感を感じたのだ。

まあ、こうして現在楽しくおしゃべりしているのだから、きっとあのあとに「なにか」あつたのだろう。

何にせよ、キヨウカがひとりでしょぼくれてるなんていう予想が外れてよかつた。

「なんだよ。何の心配もなかつたな。ライタ今日こそ頑張れよ」

深く考えるのを病やめて、ボクはいつもどおり友人の背中を押し

てやる。しかし、ライタはなぜか固まつたまま動かなかつた。

「なんで」

そして、セツセツと同じように一言「なんで」とつぶやいた。

「セツセツからどうした?『なんで』って」

大方予想は付く。ライタもボクと同じ考え方なのだろう。昨日泣いていたキヨウカが何故、いつもどおりの笑顔をこんなにも早く取り戻しているのか。

「昨日彼女は泣いていた。それは、とっても悲しいことがあったのだろう。じゃあ、なんで今日ひなちゃんとあんなふうに楽しげに話してるんだい?なんで、いつもとかわりない、凛々しい顔で廊下を歩いているんだい?」

ああ、やっぱりか。ボクも女の子といつもの理解しているわけではないし、昨日あつたすべてのことを知っているわけではない。でも、個人差はあるにしろ人は立ち直ることができるし、けんかすれば仲直りすることだってある。

たまたまキヨウカという人間の立ち直りが早いだけであつたということではないのだろうか。

いつもどおりに戻つたというなら、お前もいつもどおり、どうやって告白できるかまえむきにかんがえろよなーそういうもんじゃないか?

ボクがライタにそう言おうとした時、

「なんで。なんで今日の彼女たちは、昨日よりもずっと楽しそうなんだい?」

ボクはライタの話がまだ続いていたことに気がついていなかつた。

「…いつもどおりじゃないか?」

思わずボクは反論してしまつ。田の前にあるのは、いつもと変わらない風景だ。

ライタは檸の木の下をじつと見たまま動かない。

「ちがうよ。昨日よりもずっとずっとたのしそうだ」

ボクにはわからない彼女たちの表情の変化が、ライタには分かっ

てしまつているよつだつた。こつも、彼女たちを本氣でみてくるイタだからわかるのだろう。

「なんとこゝか、昨日よつもずつと自然で、心から笑つてゐる様で、つりやましくなるくらこに樂しそうなんだ」

いつものように熱っぽく大げさに語るでもなく、ただ淡々と話すライタは、また「なんで」とつぶやく。

ボクには見えない特別な笑顔。

ライタが見てゐるのはきつと、片思ににあつがちな幻想なんかじやないのだろう。

ボクもそれが見たくて思わず田をひかつてしまつ。でも、みえなかつた。

わかりきつていた。

キヨウカのことを本氣で思つてゐるからこゝに見えたのであらうかの幸せな表情は、どれだけ高名な画家でも表現することのできないうつくしいものなのだろう。ゴッホのように本能的で、モネのように清楚で、喜多川歌麿のように扇情的でバッハのよつに壮大で、ヴィスコンティのよつになまなましく、ジョルジオのよつな矛盾を孕んだ…言つて思ふことのできない美しい表情。

田の前にあるのに、ボクには届かない。やはり、少しうらやましくなる。

「明日からひとつでここにくるよ。きつと、ボクのこの疑問にもキミは答えをくれるのだろう。でも、この答えはじぶんでだしたい。間違つてもいいんだ。わかつたらあつと、キヨウカちゃんに田で生きそうな気がするんだ。でも、君に甘えるわけには行かない。リコウノスケくんがそばにいると、すぐに甘えてしまいそうだ。だから、教室で待つていてくれないか？」

ライタの顔は真剣だった。このボクがつりやましく思つてしまつくらいい。

「君なら答えをくれる……？」

ライタの言葉をもう一度おもいかえしてみる。

「ボクにはわからないよ。答えたって出せない。見えてすらいないんだから。」

「…スケ…ん。リュウノスケくん！おきてくれ！」

「…ん」

「気がついたら、また眠っていたようだ。昼休みに一度寝てしまふなんて小学生にあるまじき行為ではないだろ？」

「…これはまた、嫌な夢だつた。」

夢の内容は、つっこみの間のことだ。夢は記憶の整理のことを語つらし、と本で読んだことがある。寝ている間に、今日あつたことを総復習するだけでなく、日頃のストレスに感じていることを夢に見て、そのストレスを解消するといつ。どういったらそのようにストレスが消えてなくなる（？）のか、ボクには分からぬ。しかし、これも本で聞きかじつた知識なのだけど、夢の内容は覚えていてもいいことはないらしい。それが何故なのか、という重要な部分を忘れてしまつたのだけど、あまり見ていて楽しくなかつたし忘れることにした。

そんなことを考えつゝ、呼ばれる方向を見てみると、ぼんやりまみれのライタが立つていた。

そのシンシン頭になぜか細い木片を大量に紛れ込ませて、紺色の制服も今は驚きの白さである。

はじめ田が合つたとき、得体の知れない化け物が目の前にいるので夢の続きかとも思つたが、違つよううであった。

「お前、どうしたの？ そのかつこつ！」

「いや、ついわつきた… その柄にもなくハツ当たりして柱を殴りつけたら思いのほかもろくて… こぶしが貫通してしまつてだね？ 柱に上半身を突つ込んでしまつたんだよ。いやあ、ハツ当たりなんてなれないことはするもんじやあないねつ！ あはははつ！」

「ハツ当たりつてことは… おまえ、今日も告白できなかつたのか？」

「

小さな静寂、言つてはならないことを口にしてしまつたときのよ
うな氣ますわ。

今日も外では小鳥が平和を謳う。
うた

「…つ。…ほえ？」

ばつくれやがつた。

「ほえ? じゅねーだりおおおおおー! つてめーーこつまでボクを!」

ボクは感極まってライタにヘッドロックをかます。ほこりが付くのだったかまうもんか。こいつはお仕置きが必要だ。

暴力反対がよし。アグレッシブ
憎悪は新

「うむかー。向まつからボクをお面寝させたこの娘が、どう

た？おかげでこのところ夜に寝られなくて困ってるんだよ！」

「いいよ？寝ることを選んだのは君じゃないか」

ライタ。このほかほか陽気で暖かな日陰のした、ボーッとしてた

を持つてゐるとか

「ねむくなるね」

「ボクをまたせてるのは？」

。 再び訪れる静寂。
。 まえ? 今日も外ではクラスメイトの元気なあそび声。

「うるさアアアアアアアああああああああああああああああい！」
三菱商事二番目。

言いつてはいるボクらを注意したのは、ひなと遊んでいたレンで

あつた。

学校中に響くのではないかとも思われるその声で、ボクらは驚き
いいうのをやめていた。

「もうつーふたりともケンカはよくないんだよー！するなら外でやつて！」

『はい』

ふたり仲良く返事をする。レンは腰にてお皿で「よしよし」とつたあと、机に座りなおして、何もなかつたようにひなと一人で遊び出した。

「彼女はいい風紀委員になるだろ？」「うん」

そうつぶやいたライタにボクは「そりだな」とうなずいた。ボクらは再度話しを続ける。

「おまえさー。このまま卒業とかしちゃうんじゃないの？」

「うん…」

ライタはうつむき、空気が抜けたかのようにしょぼくれる。しかし、すぐに顔を上げて自分に「そんなのではいかん！」と言い聞かせるようにブンブンと顔を横に振った。

「言い訳がましいのは分かつてんんだ。でもさ、なんで彼女たちがあんなに楽しそうに笑うようになったのかっていう答えが出ないと、一步も前に進めないでいるボクが居る。今日での日から一週間近くたつけど、恥ずかしい話まったく答えなんて出ない」

「…」

思つたよりも事態は深刻そうだ。

「でもさ、僕なりに彼女に気持ちを伝える方法は考えたんだつ！なすけて、ロマンチック大作戦！女の子つてさ、やっぱりロマンチックな言葉に弱いんじゃないかなっておもつて。ホラーこれー台本考えてきたんだよね」

ライタは原稿用紙四枚にも及ぶその超大作をポケットの中からとりだし、ボクに見せ付ける。急に作ったような笑顔になつたライタは、どこかカラ元気でみていて痛々しい。

だから、

「ライタ」

こんなときだからこそ友達がでしゃばらなければならぬんじや

ないのか？

「なんだい？」

「お前は、自分で答えを出すつゝ言つたけど、このままでは答えなんて出るのか？」

「それは、だすよ」

「無理だよ」

ライタの顔がつめたく翳る。ボクの言葉に怒るのか？失望しているのか？そのどちらだつていい。面と向かつて、このくらいのこと言えないようじや友達じやない。ボクはライタを信じているからこそ、ライタの顔色なんて一切気にしない。

…

ライタは無言であった。自分でも心のどこかに何かがひつつかつていることに気がついているのだろう。

「お前はその『答え』って言ひのを隠れ蓑にして告白する勇氣のない自分を正当化してるだけだ。『答えが出ないから一步も踏み出せない』？『言い訳がましいのは分かってる』？はつ…バカか？それ自体が完璧なる、何の正当性もないわけだ。なんで『答え』が出来ないから告白できないのか説明してみる。答えなんてはじめから出す気もない。無論、このままじやお前は一生自分に都合のいい言い訳ばかりして告白なんてできない」

「それは…」

ああ。反論したいのは分かる。でも、うまく言えないことだつてわかつてゐる。ライタはきっと、本氣で悩んでいたんだろう。でも、出すことのできない答えをずっと追いかけるのは一生その先に進めないことを意味している。あえて厳しいことを言わなければ状況を開拓することなんてできない。

ボクにはお前の見ていた風景を見ることができなかつたし、その先にある『答え』なんて予想も付かない。でも、迷つてお前に助言してやるくらいはできるんだぜ？

「ひとりで成し遂げる必要なんであるのか？お前はいつの間にか全

部自分でやろうって考えるようになってしまっているよ。あれから、
たいして相談もしなくなつたじゃないか。1週間たつて忘れちまつ
たのか？ボクはライタに告白を手伝つてくれつて言われたんだぞ。
最後まで付き合つてやる。すこしはボクを頼つたらどうだ？」
ボクの話を聞き終わつて、ライタは少し悩んだあと、ライタは言
葉を発した。意外だつたのは思いのほか感情的でないことだ。怒る
と思ったのだが。

「いまさらだけど、それじゃ僕の本当の気持ちといふことになるのかな？全て他人の言つたとおりに動くなんてことはないけど、僕はきっとキミの言葉に納得したら大体そのとおりに動くし、思つてしまつ。それは、僕の思つてたことなのかな。僕の力だけで告白できてこそ本当の気持ちが伝わるんじゃないかと思う

ボケはため息をつく。恋とは眞面目なことが、今の自分のことも見えなくなるとは、やはり深刻だ。

「ボクはライタが手に持ったままの皆田の台本を指差した。
「じゃあ、聞くけど。そこに書いてあるロマンチックな言葉は本当にお前の気持ちなのか。飾り立てたムードとか、ややんとする言葉を女の子は夢見るのかもしれない。でも、その夢は皆田の瞬間だけだろ？ 限りなく嘘に近い脚色されすぎた『本当の気持ち』よりも、お前の『いつとおりライタの本当の気持ちをぶつければいい』とボクも思つよ」

- 1 -

「これがボクの考えだ。お前はさつき『キニ（ボク）の言葉に納得したら』って言つたよな。そのとおり。これを聞いた後に最終的に納得するのはライタ自信だ。ボクの考えが正しいにしろ、そうでないにしろそれは参考でしかないんだから、答えを出しているのはいつもおまえ自身だ。最後まで付き合つてやるから、がんばろうぜ？」

「いつて恥ずかしくなるよつた言葉の数々だ。ライタのことをおげさだと笑えないな。

まあ、大切な人のためだつたら、つい熱くなつてみんな饒舌になつてしまふのかもしれない。

ライタはもうしわけなさそうに口を開いた。

「またキミの力を借りても、いいのだろうか

「何をいまさう。友達だろ」

「ありがとう」

これで、昼休み教室に縛られなくてよくなりそうだ。

「全部終わつてからいえよ」

ボクが最後にそういうて、言い合いは終わつた。

結構大きな声で言い合つていたのだが、ひなもレンも注意してこなかつた。

昼休みはあと5分ある。さあ、作戦会議だ。

第五幕 翁草（中）（後書き）

今日は長いですが、読んでくださいありがとうござります。
第一章とつながっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5903z/>

とある学園のことです。

2011年12月28日21時53分発行